

〔遺伝資源の収集・評価・保存〕

## トルコギキョウ弱ロゼット性系統の雑種第1代の評価

～弱ロゼット性の安定性～

宮下千枝子・南 晴文\*

(園芸部・\*大島園芸技術センター)

【要約】育成系統No.3のF<sub>1</sub>11系統は、高温下でロゼットせずに安定して節間伸長する。一方、節間伸長後の花芽形成については温度や日長などの環境条件の影響を強く受けることが示唆される。

## 【目的】

トルコギキョウの弱ロゼット性系統No.3を片親にしたF<sub>1</sub>系統について、大島と立川の2圃場で夏播き栽培を行い、その弱ロゼット性の安定度を評価する。

## 【方法】

育成系統No.3、No.3と高温下で抽苔した市販品種後代とを交配したF<sub>1</sub>11系統およびロゼットしにくいF<sub>1</sub>品種‘メロウピンク’を供試し、2004年夏、大島と立川の2圃場で栽培評価を行った。播種と定植は、大島では6月14日と7月28日、立川では約2週間後の6月29日と8月11日に行い、慣行で栽培を行った(表1)。定植から2ヵ月後に節間伸長株率を、4ヵ月後に開花株率を調査した。

## 【成果の概要】

- 1) 育苗中の気温は2圃場ともに平均約30℃と、ロゼット化誘導に十分な高温条件となった(表2)。50%開花期は大島が9月下～10月上旬、立川が10月下～11月上旬であり、約1ヵ月の差があった。
- 2) 2圃場におけるF<sub>1</sub>11系統の節間伸長株率は全て8割以上と高率であった(図1)。一方、開花株率については、大島では全て76%以上と高率であったのに対し、立川では32～94%とばらつきが見られ、もっとも差の大きい系統では大島での93%に比べて立川では32%と著しく低かった。立川では開花期が大島よりも約1ヵ月遅く、また節間伸長後未開花株の一部が12月以降に遅れて出蕾しており、立川では花芽形成が大島よりも遅延する傾向であった。これらのことから、No.3のF<sub>1</sub>の高温下での節間伸長性は安定形質であるが、節間伸長後の花芽形成については栽培条件により時期が大きく左右される形質であることが示唆された。
- 3) トルコギキョウの花芽形成を促進する栽培条件としては、高温や長日条件が知られている。定植後の平均気温は大島のほうが約2℃高く(表2)、また積算日照時間も大島のほうがやや長かった(図2)。このことから、立川に比べて大島での開花が早く開花株率が高かったことの要因として、定植後の高温や長日条件が花芽形成を促進したことが考えられる。
- 4) まとめ：供試したNo.3のF<sub>1</sub>11系統は、高温下でロゼットせずに安定して節間伸長することを確認した。一方、節間伸長後の花芽形成については温度や日長などの影響を強く受けることが示唆されたため、これらの環境条件の影響についてさらに検証を進めることが必要である。

表1 耕種概要

項目	大島	立川
播種	6月14日	6月29日
定植	7月28日	8月11日
育苗	200穴セルトレイ, 培養土「花用がっちりくん」	
区制	1区制, 32~56株/区	
栽植密度	株間12cm×7条植え	株間10cm×9条植え (真中1条抜き)
施肥・灌水	基肥 N:P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> :K <sub>2</sub> O=10kg/10a, 追肥は液肥を適宜施用, 点滴灌水	
温度管理	定植後は暖房機により20℃以上に管理	

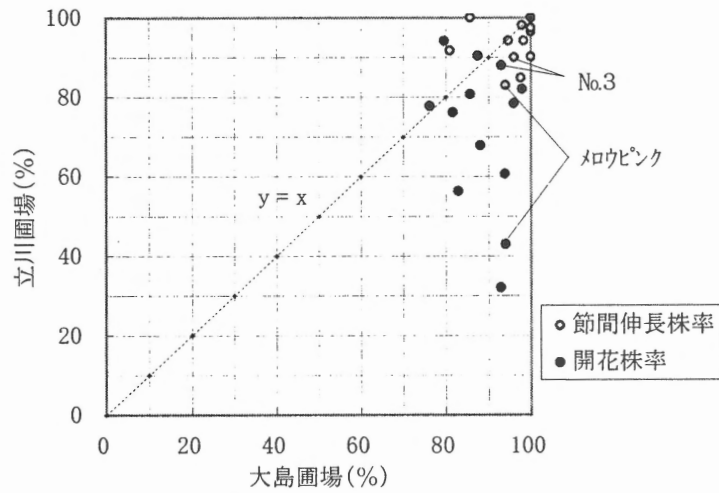


図1 2圃場での夏播き栽培におけるNo.3の F<sub>1</sub> の節間伸長株率と開花株率  
節間伸長株=節間伸長した草丈15cm以上の株。

表2 栽培期間中の気温

時期		大島	立川	差
育苗期	最高 <sup>a</sup>	37.4	39.8	-2.4
	平均 <sup>b</sup>	29.6	30.3	-0.7
	最低 <sup>c</sup>	23.9	24.7	-0.8
定植後 10週間	最高	33.0	31.7	+1.3
	平均	26.7	24.8	+1.9
	最低	23.1	20.7	+2.4

a) 日最高値の平均。b) 日平均値の平均。c) 日最低値の平均。

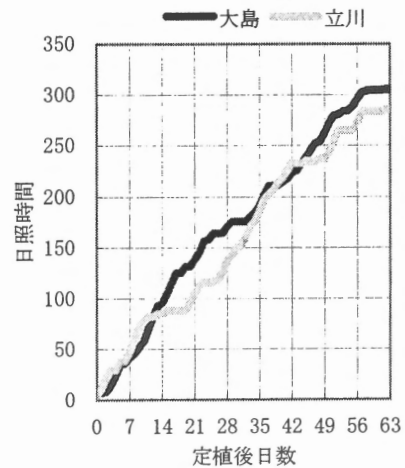


図2 定植後の積算日照時間

気象庁提供のデータ。大島は大島測候所の、立川はアメダス府中地点の観測値を使用した。